
日本図書館文化史研究会

ニューズレター

第 115 号 2011 年 2 月 18 日

日本図書館文化史研究会

<http://www.soc.nii.ac.jp/jalih/index.html>

〒101-8301 千代田区神田駿河台 1-1

明治大学司書・司書教諭課程
郵便振替口座 00170-5-164973

■■ 目 次 ■■

2010 年度第 3 回研究例会 図書館建築の歴史を考える集いのご案内	2
『ニューズレター』原稿募集のお知らせ	
『図書館建築発展史』割引販売のご案内	
図書館文化史研究 文献紹介	5
豊後レイコ『あるライブラリアンの記録・補遺—写真と資料で綴る 長崎・大阪 CIE 図書館から大阪 ACC 図書館初期まで—』（阪田蓉子）	
河井弘志『ドイツの公共図書館思想史』（三浦太郎）	
『満鉄図書館史』頒布のお知らせ	
2010 年度第 2 回研究例会「清水正三資料」中間報告会報告	9
『図書館文化史研究』第 29 号原稿募集のお知らせ	
運営委員会通信	11
事務局だより	12
会費納入のお願い	
住所変更等のご連絡をお願いします	
会員動向	

日本図書館文化史研究会
2010年度第3回研究例会

図書館建築の歴史を考える集いのご案内

このたび西川馨氏が戦後日本の図書館建築の歴史をまとめた『図書館建築発展史』を刊行されました。これを記念して、日本図書館協会、キハラ株式会社、日本図書館文化史研究会の3団体が共催して「図書館建築の歴史を考える集い」を開催することになりました。是非ともご参加ください。

「集い」の際に、同書の割引販売を行います。割引販売のご案内は4ページをご覧ください。また、「集い」終了後に懇親会を開催します。同書の購入、ならびに懇親会への参加をご希望の方も、あわせてお申し込みください。

記

- 日 時： 2011年3月26日(土) 13時20分～16時50分
- 場 所： 日本図書館協会会館2階研修室(東京都中央区新川1-11-14)
- 交 通： 東京メトロ茅場町駅(東西線, 日比谷線) 下車徒歩5分
<http://www.jla.or.jp/kaikan.htm>

※ 日本図書館協会会館の位置、交通等は4ページ掲載の地図をご参照ください。

- 参加費： 500円
- 懇親会費： 5,000円
香味亭 中央区日本橋茅場町1-11-2 フジビル B1
電話 3664-2169
地下鉄茅場町駅3番出口前
- 申込方法： 参加ご希望の方は、次の事項を明記して下記申込先まで、郵便、ファックス、または電子メールでお申込ください。
氏名(ふりがな)、所属、『図書館建築発展史』の会場での購入希望の有無、懇親会参加希望の有無
- 申込先： 〒321-3295 宇都宮市竹下町908 作新学院大学 小黒 浩司
電子メール：oguro@sakushin-u.ac.jp
ファックス：028-670-3671
- 申込締切： 2011年3月12日(必着) でお願ひします。
- プログラム
12:50- 受付開始
13:20-13:30 開会挨拶
13:30-14:30 発表① 小黒浩司「歴史的図書館建築研究序説」
14:40-15:40 発表② 西川 馨「書きながら考えたこと」
15:50-16:50 質疑・討論
17:20- 懇親会

【発表 1】

○ 発表者

西川 馨

○ 発表題名

図書館建築発展史：書きながら考えたこと

○ 発表要旨

はじめに

- 1) STRATEGY
 - 2) 利用を掘り起こす
 - 3) 住民運動
 - 4) 建築の流れ，建築の外の流れ—＜戦略目標を見ながら＞
- おわりに

【発表 2】

○ 発表者

小黒 浩司（作新学院大学）

○ 発表題名

歴史的図書館建築研究序説

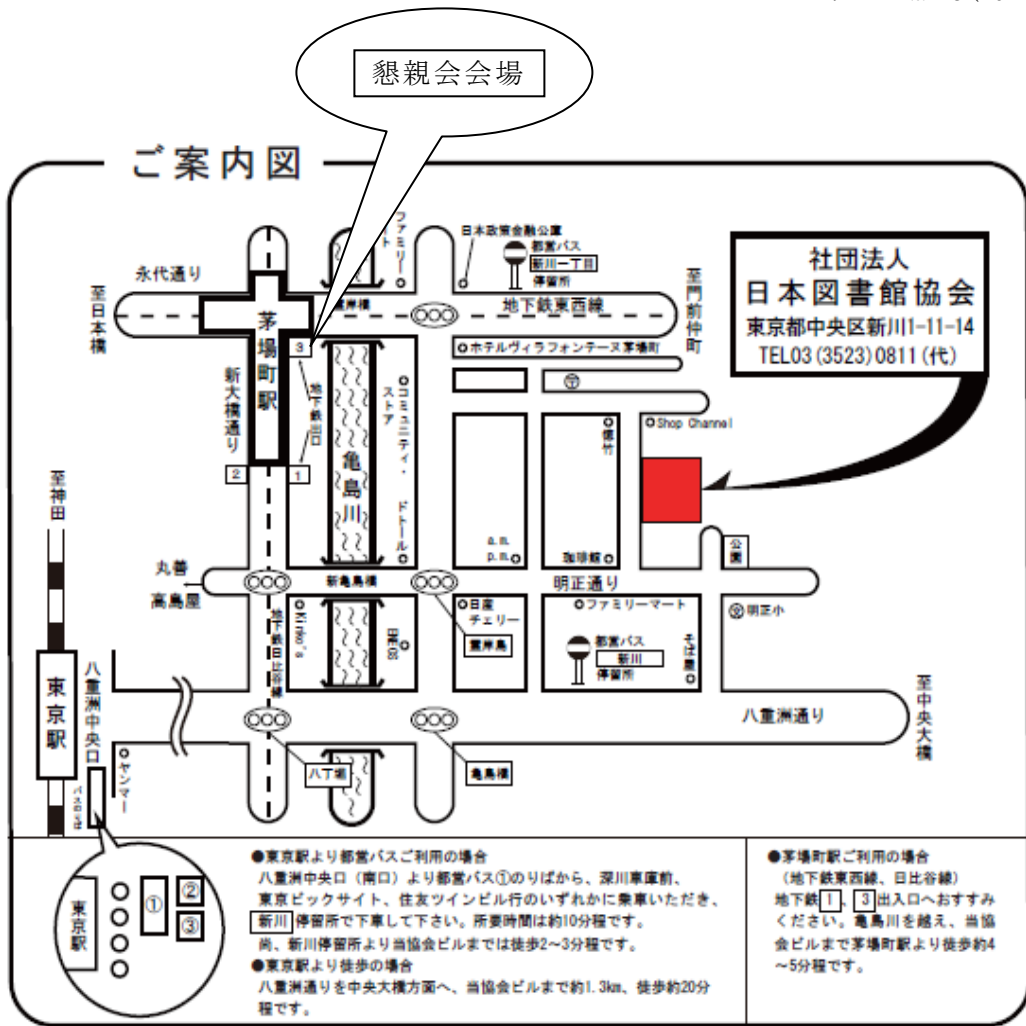
○ 発表要旨

歴史的図書館建築の定義は難しいが，日本の図書館建築の歴史を次の五つに区分してみた。また歴史的図書館建築の保存のあり方などについても，考えてみたい。

- ① 近世（～1868）：土蔵造
- ② 近代 1 期（1868～1923）：煉瓦造
- ③ 近代 2 期（1923～1945）：鉄筋コンクリート（RC）造の耐震・耐火建築
- ④ 戦後 1 期（1945～1965）：モジュラー・プランニング（Modular planning）
- ⑤ 戦後 2 期（1965～1995）：図書館サービスの多様化

『ニューズレター』原稿募集のお知らせ

ニューズレターの原稿を常時受け付けています。次号（116号）掲載を希望される場合，2011年4月上旬までに別記事務局宛原稿をご送付ください。



『図書館建築発展史』割引販売のご案内

西川馨氏の近著『図書館建築発展史：戦後のめざましい発展をもたらしたものは何か』（出版：丸善プラネット、出版年月：2010.11、B5版・291p、ISBN：978-4-86345-066-0、税込価格：6,300円）を、今回の「図書館建築の歴史を考える集い」会場にて、割引販売を実施します。提供価格は5,000円です。

ご希望の方は「集い」参加申込みの際に、あわせてご連絡ください。申込締め切りは3月12日です。

なお、この割引販売は「集い」参加の方に限って実施するものです。郵送等は受け付けておりません。あらかじめご了承ください。

【図書館文化史研究 文献紹介】

あるライブラリアンの記録・補遺—写真と資料で綴る
長崎・大阪CIE図書館から大阪ACC図書館初期まで—
／豊後レイコ 著，田口瑛子・深井耀子 企画・編
(シリーズ 私と図書館 No. 3)
京都：女性図書館職研究会・日本図書館研究会
図書館職の記録研究グループ 2010.8
59p；26cm

序文は、今まど子先生です。大阪での豊後さんの講演会に東京から駆けつけてくださっていました。今先生の「CIE 図書館と豊後さんと私」によりますと「CIE の図書館が日本に存在したのは 1945 年 11 月 15 日から 1952 年 4 月 28 日までの約 6 年 5 ヶ月間のこと」だそうです。研究会のメンバーの半数近くにとっては、この年代は既に歴史上のことであり、生まれておられなかった方も多いのでしょうね。

今先生の序文によりますと、ご自身が占領軍時代の図書館について研究されていたこと、その際豊後さんにもインタビューを重ねておられたとの関わりが分かります。先行研究のないまま、ひたすら占領関係の本を読んだと記しておられます。

さて、この『あるライブラリアンの記録・補遺—写真と資料で綴る長崎・大阪 CIE 図書館から大阪 ACC 図書館初期まで—』刊行の発端は 2009 年 5 月の私たちの研究会例会だったそうです。ご報告の折に展示して下さっていたお写真や文書を編集して下さったものです。出席できなかった方にとって、いえ、私のようにもっとじっくり見せていただきたいなと思っていた者にとっても、大変有難い出版です。そして無論、これから占領期の図書館についてあるいは当時のアメリカの図書館サービスとの比較研究を進めたい方がたにとっては、必読の記録です。

それにしても『八八歳レイ子の軌跡—原子野・図書館・エルダーホステル—』（ドメス出版、2008 年）を読ませていただいた時にもつくづく感じたことですが、よくもまあこれだけきちんと多くの写真や文書を保管しておられたこと、しかもいつ、どこで、誰と、といった記録を研究会のために、再度資料によって確認されていることなど、さすが名うてのライブラリアン！であると認識を新たにさせられました。

最初の写真（古い絵葉書より）は「1928 年竣工の長崎税関庁舎」。思わず、え、税関？と戸惑いますが、実は 1948 年 7 月から 1952 年 4 月まで 1 階部分が CIE 図書館として利用されていたのです。1949 年の雑誌の巡回サービスによる原爆被災者宅の訪問写真もあります。当時雑誌室担当だった川上繁治さん

がサンタクロースに扮した写真もありました。「メリークリスマス」と言いながらジープで町中を走ったのだそうです。敗戦後まだ4年しか経っていないその頃は、国産の車などは無論なく、占領軍のジープが子どもにとってはとても珍しく、またサンタクロースも夢のような存在でインパクトが強く、シープを追いかけていたのではなかったでしょうか。まさしく「出かけていく」サービスと広報活動がなされていました。写真で見る CIE 図書館活動です。続きはぜひ、本誌をご覧ください。

豊後さんが1984年になされたアンケート「CIE・ACC元スタッフは職場をどう観ていたか」のまとめも掲載されています。日本人29名ばかりではなく、アメリカ人6名の方にも質問票を送り回答を得ておられます。さすが豊後さんだと感心するばかりです。占領下の日本とアメリカの関わりについて、その一端を知ることができる貴重な資料です。

ちなみにJLAの教科書『図書及び図書館史』（JLA図書館情報学テキストシリーズ2-12, 2010年）には豊後さんとフライデー館長の名前と写真が掲載されています。「大阪CIE図書館児童室でのストーリーアワー」での実演写真です。深井さんは教科書の編著者（小黒浩司さん、当研究会の前事務局長、現研究委員長）の見識を感じると紹介しておられます。

豊後さんは深井さん、田口さんたちに『あるライブラリアンの記録』は私にとってよい米寿記念になったが、この『補遺』出版は、私の卒寿記念になりそうである。あたたかい贈り物を有難く拝受いたします」と記しておられます。

日本図書館文化史研究会の私どもも豊後さんと深井さん、田口さんそして「私と長崎CIE図書館」の執筆者川上繁治さんのほか、一文を寄せられた北野康子さん、浜口美由紀さんたちに感謝したいと思います。

最後にもうひとつ、余談で恐縮ですが、研究会の折にお目にかかった豊後さんが、髪も素敵にセットなさって、確かスーツ姿でビシッと決めておられたことがとても印象に残りました。かつて私の学生時代（1950年代後半！）に英文学の斉藤勇先生の講義を受ける時は、先輩達はスーツ姿で教室に行ったものだと聞いたことを思い起こしました。立場は異なり、講師としての豊後さんですが、装いも含めて身だしなみを整えるという伝統的なマナーを継承しておられることを痛感しました。後輩である私どもとはやはり、全然違うなあとの感慨が残っています。

*本書の入手に関しては京都精華大学文学部 田口研究室、
田口さんにお問合せください。

阪田 蓉子（本研究会会長）

ドイツの公共図書館思想史 / 河井弘志著
 京都：京都大学図書館情報学研究会
 東京：日本図書館協会（発売），2008.10
 xi, 298p ; 22cm

本書は2008年に刊行された河井弘志氏（元立教大学教授）によるドイツ図書館史の研究書である。河井氏は米国の図書選択論の研究を進めるかたわら、ドイツ図書館史研究の著作を積み重ねてきたことでも知られており、すでに2001年に、中世から近代初期にかけての図書館学概念の展開を描いた『ドイツ図書館学の遺産』（京都大学図書館情報学研究会）を刊行している。

本書は全14章からなり、1978～2007年に発表された学術論文を再構成したものである。本書の特色は、「理論構成の発展の流れを追う歴史」であるところの「図書館学史」ではなく、「図書館の現実と密接につながった概念であり、しかも図書館の世界観に広がり、ときには図書館員や利用者の生活を導く人生観にも入り込む」（p.14）ところの「図書館思想史」の観点で、19世紀後半～20世紀前半期のドイツ図書館史を描き出した点にある。

河井氏は図書館史研究の領域を大まかに、図書館の発生史、制度史、運動史、図書館学史、図書館思想史に分け、とりわけ図書館思想史においては、ひとつの文化圏や時代に特定される考え方を研究したり、一時代の精神構造全体を社会的な視点から捉えたりする必要のあることを主張した。それは、図書館思想を図書館や図書館員、利用者のおかれた社会構造・状況との関係において、いわば「社会拘束性」のもとで記述する態度であった。図書館学では努めて客観的に理論的明快さが志向されるのに対して、図書館思想では実務や実践に曖昧さが包含されると論じている。

本書で取り上げられる図書館思想家は、プロイスカー、ラウマー、ヤナシュ、ライヤー、テーフス、ネレンベルク、フリッツ、ラーデヴィッヒ、ホーフマンら、19世紀後半～20世紀前半の人びとである。河井氏は精緻な文献調査に基づきながら、時代・社会状況を踏まえつつ、彼らの著作を丹念に読み込むなかで、それぞれの図書館思想の特質を描くことに成功していると言える。

たとえば、本書第2章ではプロイスカーを取り上げるなかで、啓蒙主義思想の風潮や産業資本の形成を社会背景としながら、実業民を対象とした民衆教育の必要性に対する意識が、彼をして体制維持思想と結合した民衆教育論を提唱させるようになった点を明らかにしている。

また、第6～7章では、下層貧困層の出身であるテーフスと学術的素養に恵まれたネレンベルクを対比的に論じている。テーフスが社会民主主義思想の台頭を背景に、下層民衆のために読書手段を与えようとする考えを土台としながら、全住民をサービス対象とする新たな民衆図書館構想へと至ったのに対し、ネレンベルクはヴィルヘルム2世の労働者保護政策に影響を受けつつ、渡米経

験をもとに米国型の公共図書館（「図書館会館」）の実現を図り、学術的な市立図書館を“下方に”開放しようとしたと論じている。

さらに、第 11～12 章では、この「図書館会館」運動を継承し通俗書の貸出を進めるラーデヴィッヒら「旧路線派」の主張と、図書館員を介して利用者への読書推進を図るホーフマンら「新路線派」の思想的対立（路線論争）の論点を明確に述べている。

河井氏は、かつて『アメリカの図書館選取論の学説史的研究』（日本図書館協会、1968 年）において、「学説の独自性は、往々にして人物の独自性に由来する。人は全て他人と異なった生活歴や思想歴をもち、これが学説にも反映されるのである。このため学説研究には必ず人物研究が伴わなければならない」（p.11）と人物像からその思想に迫ることの重要性を指摘したが、この問題意識は本書にも一貫して流れていると言える。

評者は以前、ピーター・ヴォドセク「改革と理念：ドレスデンープラウエンおよびライプツィヒにおけるヴァルター・ホフマンの図書館業績」（『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』5 号、2006 年）を紹介（翻訳）したことがあるが、本書の史的考証のあり方には学ぶべきところが大きいと感じる。

本書は図書館思想家の著作を読み解き、社会背景をからめながらオリジナルな解釈を引き出し、「図書館思想史」の観点からドイツ公共図書館史を描き出した労作と言える。なお、本書への書評には、岩猿敏生（『図書館界』61 卷 3 号、2009 年）、川崎良孝（『日本図書館情報学会誌』56 卷 2 号、2010 年）、渡邊斉志（『ドイツ研究』44 号、2010 年）のものがある。参照されたい。

三浦 太郎（明治大学文学部）

『満鉄図書館史』頒布のお知らせ

このたび村上美代治会員が『満鉄図書館史』を自費出版されました（A5 版・289 ページ）。同書は現時点では、直販のみの扱いとなっています。そこで会員の皆さまに同書を次のように実費で頒布しますので、ご利用ください。

○ 申込方法：（現在は終了しています）

日本図書館文化史研究会

2010 年度第 2 回研究例会

「清水正三資料」中間報告会報告

2010 年 12 月 25 日（土）、2010 年度第 2 回研究例会が、日本図書館協会 2 階研修室を会場に開催されました。今回は、日本図書館協会、図書館問題研究会と共催でした。参加者は 32 名です。以下、報告要旨を掲載します。

報 告①

松岡 要（日本図書館協会事務局長）

○ 報告題名

清水正三氏と清水資料の概要

○ 報告要旨

清水正三氏（1918-99 年）は 1938 年（昭和 13）に東京市に就職、市立氷川図書館に配属されたことを皮切りに図書館界に身を置かれた。日本図書館協会との関係では、戦後 1955-59 年に評議員、1959-81 年に常務理事、1981-85 年に理事、1985-89 年に参与、1989-99 年に顧問を務められた。また、1955 年（昭和 30）の図書館問題研究会の結成、1963 年（昭和 38）の『中小都市における公共図書館の運営』の作成に中核的役割を担われるなど、生涯を民主主義の砦としての図書館づくり運動に尽くされた。

報 告②

奥泉 和久（横浜女子短期大学図書館）

○ 報告題名

戦前期東京市立図書館関係資料などについて

○ 報告要旨

清水資料のうち、①東京市立図書館、②大橋図書館・竹内善作、③江戸川区立図書館、④慶應義塾大学におけるワークショップ（1951 年）の各資料について、整理状況、概要、意義などについて報告した。東京市立図書館、大橋図書館に関しては、図書や雑誌などのほか図書館用品なども幅広く収集されていること。また、江戸川区立図書館時代の資料からは、1950 年代の公共図書館の活動実態を明らかにできること、ワークショップ（1951 年）の資料からは、清水氏の図書館人生に大きな影響を与えた質の高い教育内容を知ることができるのではないかと述べた。

個人発表③

小黒 浩司 (作新学院大学)

○ 発表題名

清水資料に見る図書館の自由

○ 発表要旨

清水資料の整理で担当した『中小レポート』関係と「図書館の自由」関係の2分野について報告した。

まず『中小レポート』関係については、従来の研究の塗り替えにつながるような新資料は少ない。しかし清水氏が直接関与した各図書館の調査資料、とくに初期の岡谷市立における調査項目の検討にかかわるメモ類は貴重である。

次に「図書館の自由」関係であるが、コピー類が多いものの想像以上の分量の資料が残されており、清水氏の関心の深さがうかがわれた。なかでも氏が都立中央図書館資料部長時代に遭遇した、「足立区史問題」、「目黒区史問題」、「都立中央図書館複写申込書閲覧問題」などについては、氏による詳細なメモ類が残されており、今後の活用が期待できる。

個人発表④

西村 彩枝子 (日本図書館協会常務理事)

○ 発表題名

清水資料の整理方法とその経緯

○ 発表要旨

2000年に日本図書館協会に寄贈された清水資料の整理を2010年4月から有志ボランティアで行っている。その経過、方針、整理方法、今後の予定などについて報告した。協会資料室のスペースなどを考慮し、清水正三研究資料として扱うのではなく、個々の資料として活用できるような整理方法をとっている。文献類は12月現在、約1,000件を目録に収録し、全部で1,500件程度になると予測される。図書・雑誌類については、約半分の点検が終了したところである。今後の課題は、公開・提供方法について具体化していくこと、今回の資料整理方法を現場の図書館で活かす方法について考えることの2点である。

『図書館文化史研究』第29号原稿募集のお知らせ

機関誌『図書館文化史研究』第28号にご投稿いただいた方、ありがとうございました。審査結果は、遅くとも3月中にお知らせする予定です。

引き続き、第29号の原稿を募集します。原稿の締め切りは、2011年12月末日です。ふるってご投稿ください。

なお、この件に関するお問い合わせ、ならびに原稿の送付先は別記事務局までお願いします。

運営委員会通信

■■ 次回運営委員会について ■■

次回運営委員会を、下記のように開催します。本研究会の運営に興味・関心のある方は、是非ともご参加ください。

当日ご都合の悪い方は、別記事務局まで郵便、ファックス、または電子メールで、ご意見、ご希望等をお寄せいただければ、運営委員会で検討いたします。

記

- 日時 2011年3月26日(土) 11時～12時
- 場所 日本図書館協会会館 2階研修室
- 内容
 1. 2010年度第3回研究例会について
 2. 2011年度第1回研究例会について
 3. 2011年度研究集会・会員総会について
 4. 『図書館文化史研究』第28号について
 5. 「(仮称)図書館文化史研究文献目録」について

ほか

■■ 前回運営委員会の報告 ■■

実施日：2010年12月25日

場所：日本図書館協会会館

以下のような事項について、協議しました。

1. 2010年度研究集会・総会について
2. 2010年度第1回研究例会について
3. 2010年度第2回研究例会について
4. 2009年度決算について
5. 「(仮称)図書館文化史研究文献目録」について
6. 「(仮称)日本図書館文化史研究会奨励賞」について
7. 研究会ウェブサイト維持について
8. 2011年度研究集会について
9. 転載許可の件
10. 『図書館文化史研究』第28号について
11. 『ニューズレター』第113号について
12. 『ニューズレター』第114号について
13. 会員動向

ほか

事務局だより

■■ 会費納入のお願い ■■

2010年度会費が未納の方は納入をお願いします。会費は3,000円です。会費を納めていただく方には、封筒に「会費振替用紙在中」の朱印を捺し、振替用紙を同封しました。

なお、日本郵政公社の窓口扱いの口座送金手数料が値上げされました。つきましては、会費の送金は極力ATMをご利用くださるようお願い申し上げます。

■■ 住所変更等のご連絡をお願いします ■■

研究会からの刊行物の送り先などについて変更が生じた場合、あるいは封筒貼付の宛名ラベルの記載が不正確な場合、早めに事務局までご連絡ください。